【20】

氏名（本籍）	池田（いけだ）　元（はじめ）（岡山県）
学位の種類	文学博士
学位記番号	博甲第50号
学位授与年月日	昭和55年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科　史学専攻
学位論文題目	長谷川如是閑「国家思想」の研究―「自然」と理性批判
主査	筑波大学教授　芳賀　登
副査	筑波大学教授　井上辰雄
副査	筑波大学教授　臼井勝美

論文の要旨

本文論は1000枚をこえる論文である。この論文の主題は長谷川如是閑（明治8年～昭和44年）の国家思想に焦点をあて，しかも人間的「自然」の全面的回復とそれを保障する調和的社会を成立させる国家批判・理性批判を旨とする政治思想史研究である。

○　序論―研究の課題と方法

基本的な研究課題として，長谷川如是閑の独自性を「自然」認識とそれをベースにした「国家思想」の展開にあるとし，その批判的特質を内在的・根底的に把握することを目的としているとのべ，国家思想の「形成（第一章）」「構造（第二章）」「機能（第四・五章）」の三部分から構成されるとしている。

○　第一章　如是閑の思想的世界―原型と思想構造―

如是閑の思想的世界の形成過程を，生物的次元のあるがままの人間をあるべき人間として認めることからスタートする彼自身の内面から追体験することで解明しようとし，(1)幾多の病気との闘いを強いられた生命的危機体験から形成される「生命論的世界」，(2)職人的生活体験から形成される江戸っ子職人気質の「生活論的思想世界」，(3)日本派的思想体験から形成されてくる国民主義の上に立つ「自由論的思想世界」が，如是閑の三つの原世界であるとのべ，その具体的検討を経て論述している。

○　第二章　如是閑の「国家論」―「国家論」と「生活事実」―

国家論研究の視点では，(1)その思想の全体像評価とその根拠，(2)中心的理論＝国家論の評価とそ

の根拠を中心として，如是閑の「国家」思想のユニークさを歴史的に指摘し、産業基盤優先政策と生活基盤破壊の深刻化に対抗して，「生活事実」に立脚する国家論—市民自治の政治学—を樹立することの可能性とその意義に触れている。しかし，社会的背景・理論的背景よりは内在的論理分析に力点をおき，如是閑の活動期のピークである大正七年（1918）大朝筆禍事件より『批判』廃刊（昭和九年，1934）に至るまでのうち大正後期を中心対象として把握している。その結果，如是閑の国家論を「国家学方法論」「国家一般論」「国家現実論」の三部構成でとらえ，国家学方法論としての生活事実的視点とその進化論法則性の一貫的展開を国家一般論・国家現実論として著者の分析を通じてより鮮明にしている。

○　第三章　如是閑「国家論」の基底—進化論的思考と「行動」—

国家論を規定している進化論的思考様式を摘出し，その特質（「存在＝当為」の思考とその起点としての生活「行動」）を思想的基盤との関連でとらえようとしたものである。具体的には，宣長的「国学」と羯南・雪嶺的「日本系」に代表される日本的思考様式との関連の中で如是閑学把握につとめ，如是閑の「存在＝当為」思想が，存在の目的性（理）把握を人為を越えた「神」的次元においてとらえる宣長や「宇宙」的次元においてとらえる雪嶺と異なって，「人間」的立場の主体的「行動」次元で成立させたものであるとして位置づけている。如是閑学の広がりを保証する核の指摘であるとともに，「作為」を超える「自然＝生活事実」的根拠に立つ科学的進化論への軌道修正として位置づけている。

○　第四章　如是閑の本居宣長論—時代批判の視点と原理—

まず，如是閑の文明批判家としての時代批判の思想史的段階区分を，第一期『我等』誌前期（大正8～12年），第二期『我等』誌後期（大正13年～昭和4年）第三期『批判』誌期（昭和5～8年），第四期『批判』終刊後（昭和9年～）としている。その中で，宣長の本格的評価（第三期初頭）が日本的性格論（第四期）の先駆的かつ方法論的作品であると述べてその位置づけにつとめている。また，これを通じて宣長論のもつ「日本的性格」論の原型としての意義と時代批判としての連続性を明らかにしようとしている。そして如是閑の科学的な「生活事実」の進化論の立場に立って，宣長「漢意批判」と「自然」主義特質の把握に目を向けるとき，宣長の原始的生活主義—根源的人間生活人の本質的還元論—こそが，実質的には「ファシズム的観念形態—ファシズム的国家形態」批判・否定という時代批判にあったことが明らかになるとしている。宣長の自然主義評価において，原始的「自然＝生活」への還元という「前科学性」のもつ批判機能が，その強度において表層的な観念批判を越えたラディカルさを保証するものであり，また市民階級的立場からのものであった点が，宣長の「自然」主義に注目した理由であったと述べている。

○　第五章　如是閑の老子論—「自然」の政治学と政治的理性批判—

如是閑の老子論は，老子に託した如是閑の問題意識の析出から始まる。そして，当時における他学者の老子把握とのかかわりを述べたあと，「自然」の思想的根拠を問い，自然と作為とのかかわりあいから「自ずから然る」「自ら然る」の実質的意味を分析し，「自然＝無為自化」の政治学の存在とそれに基く政治的理性批判の中に支配・知識階級のあり方をとらえている。その中で老子が大国

家止揚の可能性という視点から，大国家が政治的＝支配的・文化的でなくなる可能性を求め，生命の絶対性・恒久性を根拠にあらゆる存在からの超越の正当性を説いて村落自治体の不死身の強靱性こそが作為的なものを超越する可能性をもつといい，「自然的国家」への形態変化を求めている点に共鳴しているとしている。これは明らかに老子に託した時代批判・武断国家批判である。そこには，如是閑自身の支配・知識階級としての「自己否定」的立場からの深い「作為＝支配」性批判とそれを保証する「作為的＝支配的」理性の批判がある。

○　結論　長谷川如是閑「国家思想」の政治思想史的意味

本論は，如是閑の一貫した課題である「人間的自然」の全体性の回復とそれを保障する「調和的社会」をめざす社会的再編成の思想的営為についての内在論的思想研究である。特殊日本的状況（「明治国家体制」）の問題点をあくまでも「制度の論理」として原理的に設定し，その国家批判の基準を普遍的価値の追求に求めている。また，「調和的社会」論の段階的展開区分を，政治的・社会的・文化的の質的推移と把握し「政治的国家体制論」「社会的職能国家体制論」「生活的文化国家体制論」段階とし，とくに「自然」復帰論としての調和的社会論の思想的ラディカル性および多元的社会＝国家論における「政治否定性」の展開を意義づけている。

以上のごとく本論文は，長谷川如是閑の明治国家体制下における文明批評家としての「人間的自然」の全体性回復の中で構想された思想的営為の作品の分析の中から，時代批判の原理，理性批判の基準となった「自然」に対する考え方を中心にすえて，国家批判の思想的位置づけをしたものである。丸山真男政治思想史学に対しても，その意味で「自然＝作為」のとらえ方から一定の批判を保有している。

審　査　の　要　旨

(1)　本論は明治国家体制批判の文明批評家・長谷川如是閑の内在論理分析を通じて明治国家体制批判の時代的段階区分を如是閑の著述評論を通して具体化したものである。従来，「国家思想」といえば国家主義思想家を通ずるものが多かったことに対しても本論の問題設定の意義は大きい。

(2)　本論は，「思想的世界」「国家論」「時代批判」を通じて国家思想をとらえ，その形成・構造・機能へのアプローチをし，三位一体的な総合把握を通じて内在論理の連続性と一貫性を論証しようとしている。また，国家思想の全体を「自然」復帰論の構想のうえにのせて，「自然」状態→「作為」状態→「人為」による自然復帰という脈絡の中でとらえようとしている点が特徴となっている。

(3)　「生活事実」に着目し「人間的自然」を大切にし，そして「調和的世界」成立に志向する如是閑が「社会的自然」を職能的・地域的集団の「自治―連合」体制としてとらえたことへの評価のために，作為と自然の関係を求めたことの意義は大きい。これなど生活者の立場に立つ思想史的考察の端緒を形成している。

(4)　丸山真男の「作為」概念の「没支配性」認識に対する批判を，「作為」と「自然的人為」の区分

がないとの考えに求め，長谷川如是閑の「自然」の意味づけは評価にあたいする。

(5) 国家思想の，「自然」の政治学と政治的理性批判というラディカルな批判性に注目して，形成・成立・展開という一貫的連続的展開としてとらえ，皮相的な昭和期如是閑＝転向説を退けた点も注目される。

以上のようにすぐれた点をあげればまだあげることができるが，本論を，基本的思考構造・段階的構造や理論構成・理論性などからアプローチしてみるとき，前者においては思考構造と段階的構造との関連づけがまだ生硬であり，後者については枠組思考が強く論理的整合性をもちつつも，歴史性を段階性に矮小化しすぎているきらいがある。しかし，それはともかく，本論の構成は，図式化すると極めて複雑な線で辿ることができる緻密な理論的枠組をもつものであり，政治思想の内在的論理分析の水準を示す理論性のあるものとして評価する。

よって著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。